

## (1) 提案のコンセプト

### ① 資産名称・概要

○資産名称 **松 本 城**

○概 要

#### ア 松本城を中核として展開した城下町と歴史の道

松本は石川氏の松本城築造とともに城下町として発展した。日本海側の塩や海産物は千国街道と犀川通船により松本にもたらされ、富山湾の鰯は野麦街道から中央高地の松本に移送された。江戸街道と呼ばれる保福寺峠越えの道は中山道に合流し、江戸への藩主参勤交代の道であり、松本藩の米の輸送路でもあった。中山道洗馬宿を起点とする北国脇往還（善光寺道）は信仰の道で、松本はその宿場の機能を有していた。また、木曾や太平洋側の地域に松本の物産を輸送する中馬の道でもあった。このように陸上交通による商業活動で中部内陸地域における商都を形成するとともに、寺院を町の外郭に配し、前方遮断の道路等の武備を施した軍事都市であった。

#### イ 松本城

##### (7) 武田信玄によって整えられた松本城の縄張り

1550年（天文19）甲斐の武田信玄は信濃の府中松本に侵攻し守護小笠原氏を敗走させ、これを手中にした。以後32年間深志城を整備し信濃経営の兵站基地とした。近世松本城の本丸・二の丸・三の丸の縄張りは、ほぼこの時出来上がっている。1582年（天正10）武田氏が滅び旧地を回復したのは小笠原氏で、深志城を松本城と改めた。

##### (4) 豊臣方の石川数正により鉄砲戦に備えて築かれた松本城天守

豊臣秀吉は石川数正を松本に入封させ江戸の家康を監視する五重六階の松本城天守を1593年（文禄2）から1594年（文禄3）にかけて築造させた。この時建てられたのは天守・渡櫓・乾小天守の3棟である。石川数正とその子康長はこのほかに総堀を整え、土塁を築き土塀を建て、諸櫓や門楼を造り、城内の館の修造および武家屋敷の建設を行い近世城郭として松本城を整備した。また、鉄砲戦を想定し堀幅を広げ、天守の壁を厚くし、銃眼を穿ち、土塁上の土塀にも2000余の狭間を作り武備を固めた。

##### (7) 軟弱地盤に工夫を凝らして築造された典型的な平城

松本城天守は女鳥羽川と薄川の複合扇状地の先端の軟弱地盤に平城として築造された。石垣を低くし、天守の重量を均等に地面に伝えるため天守台内部に16本の榿の支持柱を埋め込んだ。さらに石垣を積むために堀底に松の丸太を筏のように敷き詰め沈下を防止する筏地形の工法が採用された。戦国末期、鉄砲戦を想定し「戦うための城構え」をもった漆黒の松本城天守は、関ヶ原の戦い以後実質上徳川氏の勢力が拡大し、泰平の世になってから権威の象徴として建てられた白亜の天守とは異なった性格をもつ我が国に現存する唯一の五重六階の天守である。

##### (4) 泰平の世になって付設された辰巳附櫓と月見櫓

数正・康長父子により天守が築造されてから40年後、1634年（寛永11）頃、三代将軍家光の従兄弟松平直政が入封し辰巳附櫓と月見櫓を付設した。この二棟には際立った武備は見当たらない。総檜造りで三方取り外し可能な舞良戸や朱の刎高欄を巡らし、天井は船底天井に仕上げられている。また、壁は白漆喰の大壁作りで瀟洒な造りになっており、戦うための天守と好対照をなす泰平の世の城郭である。

このように松本城天守は戦う機能を備えた天守と泰平の世の優雅な櫓が複合した現存する我が国最古の五重六階の城郭建築である。